

大深沢わいわい散策

2005.7.17



胆沢扇状地と真城寺



大深沢概要

安永風土記によると、大深沢地区は中野村本郷に属します。

- 法王山 真城寺 (小名 上林)
- 浜田屋敷
- 上林屋敷五軒等 (大深沢屋敷二軒、中嶋二件 他)
- ※安永6年当時、中野村本郷と端郷折居の境界は大深沢川でした。

現在の字名

- 上野、川尻前、上林下、土手根、中林、中林下、西大深沢、東大深沢、浜田
- 西大深沢に縄文時代の遺跡があります。
- 上林の地名が無くなっています。
- 土手根、中林、中林下は端郷折居村に属していました。

「大深沢と折館地区のむかし」

胆沢扇状地の東縁端に位置する前沢から真城に続く段丘上の一帯は、むかしは森林と原野であり、前沢付近では「上野原」と呼ばれ、真城の上野は、むかしは「宇和野」と呼ばれていました。

今から五千年以上前の縄文時代に、人々は奥羽山脈に沿う西の山を通り、山近くに住み竪穴住居に暮らしました。木の実を採り、獣を狩りする生活には良い環境であったと考えられます。そして五千年前くらいには、平地である上野の地区にも人々が生活しました。

その痕跡が「中島遺跡」として現代になって発掘調査されています。

「折館地区」の編入

昭和29年(1954)4月に、1町5村が合併して水沢市が誕生しました。

翌年の昭和30年(1955)7月、小山村から折館地区が水沢市真城に編入されました。

折館地区は、小山村館赤地区でした。真城に編入された字名は馬籠館、前館、大深沢、北長根、赤齊美(一部)です。

なお、館赤改め折館、前館改め折居館は新しくつくられた地名であるといいます。

編入を望んだ理由は、長い間真城村の生活圏に含まれていたからです。距離的な面を柱に経済・教育・医療など古くから真城の人達と一緒に生活してきたのです。

折館の歴史

折館地区の東側を陸羽街道が通り、その近辺に縄文時代の中林遺跡があります。更に平安時代の陸稲と集落の遺跡が発見されています。その後平泉藤原時代に折居につくられた北大門の警備にあたる武士の住まいが南側の堤が沢にあったといいます。

戦国末期永正4年(1507)馬籠館ができ、馬籠氏が住みその後千田氏が住み明治初年まで続きました。

馬籠館

戦国時代、館主は葛西氏家臣、馬籠四郎兵衛

文明2年(1470)宮城県本吉郡馬籠館の館主、馬籠治郎左衛門が長坂七郎と知行地争いをしました。争いの裁定をした宗家葛西左衛門の命により、その長子長之助が永正3年(1506)堀切郷のほか4郷から170貫の知行を与えられました。翌年(1507)堀切に館を築いて移り葛西氏配下の堀切、馬籠館の祖となりました。

永正4年(1507)11月26日馬籠長之助宛、葛西左衛門尉実行状によると

1. 姉村郷
 1. 中野郷
 1. 小山郷
 1. 百岡郷
 1. 堀切郷
- 計5郷

葛西氏配下でありながら葛西氏滅亡の時生きのび、千田氏となって明治初年まで続いていました。

昭和稲荷神社



お稲荷さんは一般には商売繁盛の神様と言われてい
ます。

本来は農業の神様で、農村社会で発生したのではと言
われています。そして、稲荷は「稲成り」の転化ではな
いかと考えられています。

京都市伏見区に鎮座する伏見稲荷神社がお稲荷さんの
中心として、全国に3万とも4万社とも言われ、歴史は
古く800年代には天皇家の信仰を受けています。

昭和稲荷神社も、昭和30年代初め頃まで、花柳界に
働くあでやかな女性達のお参りで賑わう景色があったこ
とを思い出します。

真城寺

現在は、真城の大半を占める平地が一望できる見晴台
のような位置に建ち、檀家は真城地区以外も含めて千軒
以上もあるとされる真城寺ですが、もとは、平泉藤原氏
に係わるお寺として、治承元年（1177）に中野の地区
に建立されました。

当時は北上川の流れが度々変わる湿地であって土地が
悪く、二度の移転を繰り返し、又失火や兵火にあうなど
して、元禄5年（1692）に現在地に移転されました。



「法王山観音院真城寺と云い
浄土寺で阿弥陀如来を本尊とする。」

高倉治承元年(1177) 開山

藤原秀衡の叔父、岳運和尚の開山と云われており、平
泉藤原氏は天台宗であることから、当初は天台宗のお寺
であったと考えられています。

寺は、中野の字寺構（真城字谷地田）に七堂伽藍を建
立。開山に付随する神社、祠が残されています。

文治年間（1185以降）

浄土宗の開祖、法然上人の弟子、金光上人が奥州布教
に行脚の頃、民衆に受け入れられていた浄土宗に改宗さ
れたものではないかとの意見があります。（法然上人が
死亡した1212年、金光上人は平泉付近にいたと思わ
れます）

天正 2年 (1574) 兵火により焼失。古寺 (真城字畑ヶ田) に移転
 元禄 5年 (1692) 失火により焼失。上野の現在地に移転
 元禄 12年 (1699) 失火により焼失。翌 13年本堂再建
 明治 29年 (1896) 老朽化した本堂建築

真城寺は移転を繰り返していますが、それぞれの地に古墓が残り、古寺の墓は、雲南さまの近くに集められ供養されています。

お寺の規模

七堂伽藍

中堂 (本堂) 当葉堂
 講堂 法葉堂
 戒壇堂 搜輪
 (教典を納める九層の建物)
 文殊堂

付随する神社・祠

観音堂 (以前は観音・勢至の二堂あり)
 山神社 (寺の開山と同時に建立)
 東日大明神社 (寺の開山と同時に平泉赤堂稲荷
 神社より分社)
 白山社
 聖天堂

(安永風土記より)

平成 2年 (1990)、かんがい用水事業により大深沢を「コンクリート水路」にする計画が提示されたことに対して、「子どもたちに魚やホタルの棲む昔ながらの川を残したい」との思いから、地元のみなさんが「ふるさと水と土のふれあい事業推進委員会」(後の「大深沢水園委員会 (千葉弘委員長)」) を組織し、自然との共生を大切にした川づくりに取り組んで出来た公園です。

平成 13年 (2001) の完成後は、花壇づくり等の活動を行っており、夏にはホタルが舞い、人々が集い、川端で談笑のできるコミュニティ水園となりました。

また、この活動に対して、平成 15年 (2003) には、「(財) あしたの日本を創る協会」が主催する、全国「ふるさとづくり賞 集団の部」の「主催者賞」を受賞しています。

大深沢川と 大深沢水園



神社、観音さまと石碑 (馬櫛神)

馬歴神講は、農耕馬の馬魂を供養し、神として奉り、これを信心する人々の集まりです。

神社の縁日は3月15日と9月15日で、参加する「講員」は餅米五合と酒一升、砂糖二キログラムを持ち寄り、石碑に参拝して、精進料理と餅を頂くことになっています。

「大深沢今昔誌」より



「奥州街道と桜並木」として水沢のふるさと名所50景に指定されています。

奥州街道の桜並木

街道は時代と共にその位置が変わります。

昔、西の山の裾野を通った道は次第に平地近くなり、安倍道、安倍貞任を追う源義家が通る小山付近から、平泉藤原時代の北大門があったとされる折居より西に登り折館大深沢へとつながる古坂へ。

江戸期、幕府の街道整備（奥州街道）折居—中林—大深沢の道筋の街道になり、駅（宿場）が確立し、今では桜並木の景色が残っています。

熊堂坂(病院坂)と 熊野神社

並木街道の昔村役場があったと言われる付近から、小道に入る熊堂坂の坂を登りきるころにこの神社があります。

熊野神社は、平安時代の折居の北門に位置する折居館と関連があると思われます。

熊野信仰は、世界文化遺産に登録された和歌山県熊野地方の、険しい山々で修業する修験者の行いが熊野詣として広まり、全国を巡礼する人々により各地に信仰が開かれ、熊野神社が建立されたと思われます。

山形県羽黒山などの出羽三山も同じ修験者の道場となっています。



中林遺跡



中林で発掘調査された遺跡は、この付近一帯に何ヵ所もあり、広範囲に及ぶ遺跡があることから大きな集落があったと思われます。

段丘上にあるこの遺跡からは、多くの種類の土器が出土し、住居跡やたくさんの柱穴や石斧も確認されていることから、今から1200年程前ころの「計画された集落」と考えられる、貴重な遺跡とされています。

遺跡からは「稲」を栽培した畠の跡が見つかり、水の便が良くないこの地では「陸稲＝オカボ」が栽培されていました。アテルイの頃と重なる時代ではないでしょうか。

遺跡には他に、「奥州街道」と思われる造られた道路の跡が発掘されています。昔の道の姿が、現在につながるロマンを感じさせます。(詳しくはp88 中林遺跡参照)

この場所は、昭和37年(1962)に県立水沢農業高校の敷地になり、工事の際に土器などが出てきましたが調査されずに工事は進められました。翌年水沢市家畜センターの建設工事の際は、狭い範囲ではありましたが発掘調査がなされ、縄文時代前期の土器や石器がたくさん出土して、4000～5000年前の胆沢町小山、真城に暮らした縄文人の生活の跡が伺えます。

遺跡の位置は、大深沢川と小深沢川の間を通称「中島」と言われる地区で、大深沢から笹森にまたがる広大な遺跡とされています。

今でも畑を掘る際などには土器の出土があり、大規模な工事などの時は届出が必要となっています。

中島遺跡



家畜センター跡から

牧草地・農学校の西方を望む

(写真：岩手日報)

馬籠館と館地名の多さ

永正4年(1507)室町後期、葛西氏の家来である馬籠長之助が、宮城県本吉郡馬籠よりこの地に来て館を造り住みました。(馬籠館)

天正19年(1591)には伊達領になり、馬籠氏は仙台に移り、弟宗氏が跡を継ぎ、母方の姓の千田氏を名乗り定住しました。

伊達二代当主が鷹狩に来た折、千田家にて休み一服したと安永風土記に書いてあります。

陸羽街道に沿ったこの地に、平泉平安時代の人々が住み屋敷を構えたことから、この地には館の名前や屋敷名が今に多く残っています。

亜炭の採掘跡

樹林地帯であったこの地方には、貴重な燃料となる亜炭の採掘跡が残っています。

亜炭は、大昔の木や草が重なり地中に推積した層であり、もっと地中深くなると石炭になっていたかもしれません。



陸羽街道＝古坂



昔の、車もない、人が歩くだけで十分だった道路の時代は、坂道が多くありました。多くの人が歩き、馬が歩き、荷車を使うようになると道路は平らな方が楽であり、次第に平地に道が造られるようになります。

古坂の道は、坂上田村麻呂が蝦夷征討の際に通った坂であるとされています。

また、中林の遺跡に発見された陸羽街道と結ばれる道と考えると、この先がまた楽しみな発見へとつながりそうです。



坂上田村麻呂
(菊池容斎『前賢故実』より)

浜田屋敷と 浜田寅之助の墓

古い記録に「浜田屋敷」というのがあり、「安永風土記」には当時大深沢屋敷二軒とありました。

屋敷跡は確認できませんが、明治まで続く墓地があり、そこに浜田寅之助の墓碑が建てられています。

地名の浜田はここからきているものと思われます。

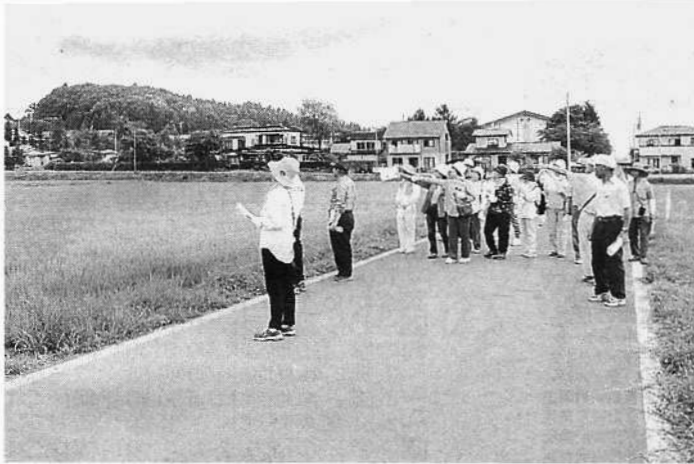


胆江日日新聞 2005年(平成17年)7月19日

地域魅力を再発見

ふるさと探訪で交流

水沢市真城



水田の広がる胆沢扇状地を見渡す参加者ら

水沢市真城公民館(佐藤正美館長)は17日、真城の文化、歴史などを学び伝承していくこと、「真

城ふるさと探訪教室」を開いた。地域住民など約20人が参加し、名所や旧跡を巡りながら、地域の魅力を再発見した。

地区内から各分野に詳しい人を案内人とし、大人から子どもまで、真城の文化を学びながら交流しよう、同館や地区センター、同地区振興会が企画した。同日は、下は5歳から80歳代までが参加し、世代間の交流を深めた。

「地域発見・大深沢わいわい散策」と銘打ち、参加者らは同公民館から徒歩で、胆沢扇状地▽中林遺跡▽昭和稲荷神社▽真城寺——などを巡った。

ホランテシアとして案内にあたった同市真城の

阿部富久寿さん(68)は「ふだん見る機会のない場所を」と、見過ごしがちな地域の名所を選び、しおりを作成して参加者らに解説した。ホランテシアは6人で構成され、4月から打ち合わせを繰り返して、事前散策を重ねたという。

彦さん(37)は、凌太くん(8)、瑠人くん(5)の2人の息子と散策。「去年も3人で参加したんですよ」と、笑顔で流れる汗をぬぐっていた。昨年の同教室では、堤尻川沿いの名所旧跡を散策し、ふるさとへの理解を深めている。

